第21回
春日井市交響楽団
定期演奏会

2012年
7月8日(日)
春日井市民会館

主　催　：春日井市交響楽団
後　援　：愛知県教育委員会、春日井市、春日井市教育委員会、(公財)かすがい市民文化財団、中日新聞社

ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
伊　藤　　太

お祝いのことば

このたび、第21回春日井市交響楽団定期演奏会が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

音楽は、日々あわただしい生活を余儀なくされている私達にとって、うるおいと安らぎを与えてくれる大切な存在となっています。

21回目を迎える本演奏会は、毎回多くの市民の皆様に音楽に親しんでいただく機会として、市内の演奏者を中心に結成された交響楽団とともに、本市の音楽振興にはかかせないものとなっております。

今回は、オーケストラ、吹奏楽、合唱、オペラと幅広く活躍中の岸本沙恵子氏の指揮にのせて、チェロ界の若き精鋭アンドレアス・ティム氏の織りなすチェロの音色が、演奏者のみならず、これを聴く人々の心に、より素晴らしい感動と充実感を与えてくれるものとご期待申し上げます。

最後に、本日の演奏会が盛況に開催されますとともに、出演者の皆様をはじめ関係各位の一層のご活躍を心からご祈念いたしまして、お祝いのことばとさせていただきます。

春日井市交響楽団
会長

中部大学　学監
三　浦　昌　夫

ごあいさつ

本日は、第21回春日井市交響楽団定期演奏会においでいただきありがとうございます。日頃、私どもに多大のご支援をいただき感謝いたしております。

わたしたち市民のオーケストラである春日井市交響楽団が、いつもみなさまの身近にいて、この7月の定期演奏会と年末恒例の「春日井市民第九演奏会」(今年は11月4日を予定しています)を中心に、素晴らしい音楽をお聴かせできることは最大の喜びです。

本日は特に、ドイツから若きチェリストのアンドレアス・ティムさんをお迎えして、チャイコフスキーの華やかな名曲をお聴きいただくことになりました。また、指揮は、団員からの強い要望もあって、昨年の岸本沙恵子さんに再度お願いいたしました。

音楽好きな春日井のみなさまのご期待にこたえて、これまでにない、より新鮮で、魅力的で美しい音楽を演奏いたすよう研鑽をつんでまいりました。　最後まで、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

プログラム
Program

ブラームス（1833〜1897）
Johannes Brahms

大学祝典序曲　ハ短調　作品80
Academic Festival Overture in C-minor Op.80

チャイコフスキー（1840〜1893）
Pyotr Ilyich Tchaikovsky

ロココの主題による変奏曲　イ長調　作品33
Variations on a Rococo Thema in A-major Op.33

《休　憩》 ***Intermission***

ドボルザーク（1841〜1904）
Antonín Leopold Dvořák

交響曲　第8番　ト長調　作品88
Symphony No.8 in G-major Op.88

チェロ独奏　**アンドレアス・ティム**

指　　揮　**岸　本　沙恵子**

演　　奏　**春日井市交響楽団**

プロフィール

チェロ独奏

アンドレアス・ティム
Andreas Timm

1975年ライプツィヒに生まれる。
ライプツィヒとリューベックの音楽大学で学ぶ。その後、ザールブリュッケンにおいて、グスタフ・リヴィニウスに師事し、最高位で演奏家資格試験に合格した。
ドイツ国内の数々のコンクールで受賞後、2001年マルクノイキルヒェン国際器楽コンクールのチェロ部門で第2位となる。
同時にドイツ奨学金財団の奨学生となり、ハンブルグで研鑽を積む。
2002年ベルリン・コンチェルトハウス管弦楽団の準首席奏者に就任。また、ソリストとしても、様々なオーケストラと共演している。
室内楽では、ライプツィヒ・ベルリンアンサンブルや、シュパンツヒトリオ、ゲヴァントハウス弦楽四重奏団との共演で人気を博した。
ラジオやテレビ放送のための録音も多く、ヨーロッパ各国および日本において精力的な演奏活動をして活躍中。
今回は、父のユルンヤーコブ・ティム（ゲヴァントハウス管弦楽団主席チェロ奏者）と共に来日。
2本のチェロの為のコンチェルト2曲（クレンゲル、ヴィヴァルディ）を名古屋、大垣でオーケストラと共演する他、室内楽のコンサートを、愛知・岐阜・新潟・静岡の各地で行う。

●「ロココの主題による変奏曲」について一問一答

Q. この曲のどこが気に入っていますか?

A. それぞれの変奏の中での音楽の盛り上がり方と、変奏間のコントラストがとても大きいことですね。ドラマティックで技巧的な部分、無垢で深いメロディー、そしてチャイコフスキーらしい雄大なロシアのメロディーも出てくるのです。

Q. オーケストラにメッセージを一言お願いします。

A. この曲の中で、チャイコフスキーは全ての楽器の強みを引き出しています。木管楽器はやりがいがあり、弦楽器も楽しめます。インスピレーション溢れる素晴らしい演奏を一緒に作り上げましょう。

指　揮

岸本　沙恵子
Kishimoto Saeko

神奈川県出身。
幼少の頃より、ピアノを始める。
県立希望ヶ丘高等学校吹奏楽部にて、学生指揮者を務めたのをきっかけに指揮者を志す。
2003年3月洗足学園音楽大学声楽専攻卒業。
在学1年次より、同大学附属指揮研究所に在籍。ベーシッククラスを経て、2004年9月、マスタークラスを修了。
指揮を秋山和慶、河地良智、川本統脩の各氏に、スコアリーディングを島田玲子、西川麻里子の各氏に師事。
2003年7月より、東京指揮研究会主催の指揮セミナーにて、ウィーン国立音楽大学指揮科准教授の湯浅勇治氏に師事。
2007年、2011年とローム・ミュージック・ファンデーションの受講生に選抜され、指揮を湯浅勇治氏に、スコアリーディング・ソルフェージュを三石潤司氏に師事。
2007年、アフィニス音楽祭のオーディションに合格し、指揮研究員として参加。
同音楽祭にて、読売日本交響楽団正指揮者の下野竜也氏に指揮の指導を受ける。
現在、オーケストラ、吹奏楽、合唱、オペラと幅広く活躍している。

春日井市交響楽団

春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井市で開きたいという市民の思いから生まれました。1990年（平成2年）11月に創立され、市内の音楽愛好家を中心に、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として活動を始めました。愛称『カポ』（KAPO）は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」（capo　頭・先頭に立つ者）の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、オーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる50名。私たちにとって最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏会においでいただき、音楽を聴く喜びとともにクラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国の内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらに、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

曲目解説

「大学祝典序曲」　ヨハネス・ブラームス（1833−1897）作曲

「大学祝典」というと卒業式の厳粛な雰囲気を想像する人が多いかも知れません。1879年にブレスラウ大学から名誉哲学博士号を授与されたブラームスが、その返礼として作曲したこの曲は、大学当局によって開かれた特別集会で初演されました。この曲の格調高い構成は、その祝典の雰囲気を想像させます。しかしブラームスはこの曲に、大学当局だけでなく、大学生の視点も盛り込んでいます。中世ドイツの大学生は、夜な夜な酒場に集まってお酒を飲んだり、歌って楽しんでいたそうです。そのような様子を、ブラームスは次の4つの学生歌を用いてこの曲に表現しました。

1. 我々は立派な校舎を建てた
2. 祖国の父
3. あの山から来るのは何？　狐狩りの歌
4. いざ楽しまん

ブラック・ユーモアで有名なブラームスは「学生の酔いどれ歌のガサツなメドレー」を作ったと語っているそうです。しかし、本作品は学生歌の奔放さと高揚感と、洗練された構成を融合することによって、アカデミズムと若いエネルギーがぶつかり合う大学を、ユーモアも交えて表現しようとしたのかも知れません。

（Cl. 藤井・Fl. 宮田）

「ロココの主題による変奏曲」　ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840−1893）作曲

チャイコフスキーがチェロの為の「ロココの主題による変奏曲」を作曲したのは、有名なピアノ協奏曲第1番とヴァイオリン協奏曲の間で、3種類の独奏楽器のために続けて作曲したわけです。2曲の協奏曲はどちらも独奏者に最初拒否されてしまったのですが、この曲を初演したチェロ奏者フィッツェンハーゲンも、曲を省略したり曲順を変えてしまいました。結果的に演奏は成功を収め、出版されたのもこのフィッツェンハーゲン版でした。本日演奏するのもこの版です。

さて、急緩急3楽章の定型に従っている協奏曲がフルコース料理だとしたら、一つのテーマが様々に形を変えて登場する変奏曲は、一つの素材を様々に料理して味わう趣向に似ています。シェフ、チャイコフスキーは、一見シンプルなテーマから魔法のように多彩な味わいを引き出して楽しませてくれます。

オペラの幕が開くような期待感を誘う前奏に続いて「これが今日の素材ですよ」と独奏チェロが紹介してくれる優美なメロディーが「ロココの主題」です。このテーマの数小節を覚えておけば、この後その素材がどう料理されていくのかを確かめる楽しみが倍増するはずです。

テーマに続いて木管楽器が演奏する謎めいたメロディーは、カップルという意味の「クープレ」と呼ばれ、料理に合わせて出されるワインのように、各変奏に添えられます。「さあ どんな料理が出るかな？」とクープレを味わっていると、最初の料理である第1変奏が始まります。チェロの小手調べのように動き回る音形の中にテーマが隠されているのが聴き取れるでしょうか？途中からは親切にもヴァイオリンがそれをなぞって教えてくれます。チェロの動きがひとしきり終わって、また例のクープレによって曲は第2変奏に導かれます。第2変奏は、様々な楽器によってテーマの断片がちりばめられ、スパイスの効いた前菜か、遊び心あふれるサラダでしょうか。このように、テーマを探す楽しみと、新しい趣向を味わう楽しみが、各変奏で用意されています。後半はチェロ独奏の見せ場もたくさんあり、また最初はさらりとシンプルだったクープレが、後半ではテーマ同様に展開されていくのも、聴き所でしょう。次々にシェフが繰り出す変奏に、テーマとクープレが、調や拍子を変えて様々な表情で、明確にまた巧妙に隠されているのを楽しんでいるうちに、様々な変奏がつながって織りなす大きな一つのドラマが見えてきたら、チャイコフスキーと時を超えて対話ができたかも知れません。

（Fl. 宮田）